

## ●テーマセッション(80分):レジリエンスの社会的構成

「レジリエンス概念の社会的構成と実践

—レジリエンス概念はどのように使用され実践されているか—」

◎中西 晶 (明治大学 経営学部 教授)

西村 知晃 (多摩大学 経営情報学部 准教授)

近藤 光 (千葉経済大学 経済学部 講師)

寺本 直城 (拓殖大学 商学部 助教)

研究成果報告形式

### [概要]

レジリエンス(resilience)という概念は、経営学・組織論のみならず、心理学、工学をはじめ、さまざまな学問分野や実践場面で使用されています。たとえば、日本においては、2011年の東日本大震災を契機に、防災・減災の視点からの「国土強靭化」を「ナショナル・レジリエンス」と呼んでいます。また、組織論者 K. ワイク と K. サトクリフは、著書『想定外のマネジメント(Managing the Unexpected)』(2017)において、想定外の事態に強い「高信頼性組織(High Reliability Organization: HRO)の原則の1つとして、「レジリエンスを決意する(Commitment to Resilience)」を挙げています。近年企業において注目されている「サイバーレジリエンス(Cyber Resilience)」もこの流れに関連するものでしょう。こうした、国家や組織レベルのレジリエンスが議論される一方、個人レベルのレジリエンスについてもさまざまな研究と実践が行われており、レジリエンス概念がマルチ・レベルのイシューであることが理解できます。このように、学際的かつマルチ・レベルの概念であるレジリエンスについての研究を紹介し、それぞれのフィールドで、この概念がどのように解釈され、実践されていったのかについて議論をしていきたいと考えています。

本セッションでは、代表研究者による問題提起の後に2つの研究成果報告を予定しています。第一は、主として組織行動論の観点からレジリエンスに関する文献研究をまとめ、「形状記憶物質」「治療」「物語」という3つのメタファーを提示した、神戸大学大学院経営学研究科金井壽宏研究室のチームを代表して、メーカーでの実務経験もある西村知晃多摩大学准教授の報告です。第二は、高信頼性組織(化)の視点から、企業のサイバーセキュリティにおけるインシデント対応チーム(Computer/Cyber Security Incident Response Team: CSIRT(シーサート))の構築プロセスを継続的に研究してきた近藤光千葉経済大学講師と寺本直城拓殖大学助教による報告です。新進気鋭の研究者による報告と会場とのディスカッションによって、レジリエンス概念が再構成されていく現場を創りあげていきましょう。

### [参加者へのメッセージ]

10月20日(日)14:40~16:00 開催(A会場:1-301)

みなさまは、「レジリエンス」という概念をどのように理解し、どのように説明されるでしょうか?今回の研究報告との差異はどこにあるのでしょうか?さまざまな専門分野の人々と議論し、それぞれが見ている「レジリエンス」を表明していくというのが、本セッションの目的のひとつなのかもしれません。